# 山本周五郎

# 平安喜遊集

# 平安喜遊集

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1970

監修
河盛好蔵
奥野健男
土岐雄三

平安喜遊集（山本周五郎小説全集23）
昭和四十五年一月三十日発行
昭和五十三年三月三十日十二刷

定価一〇〇〇円

著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部・東京(03)二六六一五一一一
編集部・東京(03)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

# 目

# 次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

平安喜遊集……七
大納言狐……九
牛……四三
もののけ……八三
地蔵……一三〇
偸盗……一六九
思い違い物語……二〇九
秋の駕籠……二八一
女は同じ物語……三二一

# 平安喜遊集

# 平安喜遊集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

# 大納言狐

## 一

狐の話ではない、恋の話なんだ。狐のことも無関係ではないが、いや、相当に深い因果関係はあるんだが、だからといって、どちらも化かしあいという意味ですか、などという者があったら、私はそんな人間は犬の胎仔であり、くそだわけであり、屁こき猿であると云いたい。云えばもっといくらでもあるのだが、これらの悪態も私はこの恋の出来事のなかで覚えたのである。

――恋にはいろいろの型がある。他人からみればそのおろかしさと道化た点でいちようだが、仔細にみればその気質と好みによって、それぞれの型があるということは否定できない。紀ノ友雄の恋はまさしく紀ノ友雄流の恋であった。

或る日、それは晩秋九月の某日のことなんだが、私はとつぜんなにがし左少将の姫の訪問をうけた。名を云わないのは思わせぶりではなく、この話が姫にとってかんばしからぬ面があるからで、また、女性たちが羞恥心をすりへらして共通の弱点を発揮する年齢に達していたという点では、いずれの姫、女御、上﨟たちと置き替えても同じことであり、少しもさしつかえはないので

ある。
「お願いよお願いよ」と姫は云った、「すぐにあの人を追っかけてってちょうだい」
供もつれず、しかも走って来たらしい。遣戸の外に立ったまま彼女はせいせいと肩で息をしていた。
――この女も縹緻がおちたな。
私は寝ころんだまま、心のなかでそう思った。化粧するひまもなく駆けつけたのだろう、被衣の下の顔は膏ぎっているし、眼はぎらぎらしているし、髪は乱れているし。うん、と私はまた心のなかで思った。すっかり縹緻がおちた、これはもう結婚するよりしようがないな。
「なにを寝ぼけてるの」と姫は叫んだ、「起きてよ、起きるんだったら、そしてすぐに追っかけてってよ、聞えないの、なまけ者」
「追っかけるって、なにを追っかけるんだ」
「起きなさい」彼女は足ぶみをした、「ゆうべまたどこかで＊＊＊たんだろ、このなまけ者の不良青年」
彼女は卑猥なことを云った。こういうあけすけな表現は左少将の姫くらいにならないとうまく出ないものだ。その点はのちに登場する摂津の山の、それがし阿闍梨などといい勝負かもしれない。
「ああ」と私は欠伸をした、「やかましいな」
「いいわよ、そうしてらっしゃい」と姫は云った、「あんたがそうならそれでいいわ、その代りあたしだってあんたの頼みなんかきいてあげやしないから」
私はとび起きた。

「寝てらっしゃいよ」と姫は云った、「あたし今夜あの方と会うんだけれど、あんたの艶書なんか渡してあげやしない、ひっちゃぶいてやるからいいわよ」
「きみはそんなことしやしないさ」と私はすばやく身支度をした、「さあ云ってくれ、どこへ、誰を追っかけるんだ」
「あたしむりにお頼みしたくはないの」
「誰をどこへ追っかけるんだ」
「でも、そうね、――お願いしてもあんたにはむりかもしれないわね」姫は横目で、ためすように私を見た、「あの人はよっぽどの決心をしているらしいし、あんたときたら怠け者のうえに口がへたなんだから」
私は誓った。彼女は私をじらし、私は彼女のために誓った。やがて彼女は云った。一人の青年が彼女に失恋し、悲しみのあまり出家遁世すると云って、摂津の国へでかけたというのである。
――この女に失恋したって、へ。と私は心の中で呟いた。
「それで」と私は口に出して云った、「その可哀そうな男というのは誰なんだ」
「紀ノ友雄さんよ」
「と、――」と私は吃った、「紀ノ友雄だって」
「いいじゃないの」と彼女は云った、「それああの人は田舎っぺえよ、男ぶりもよくないし、気もきかないし、蟹みたような顔をしているかもしれないわ、でもあの人はあんたたちと違って鳩のように善良だし、岩のようにまじめよ」
「私は笑わないよ」
「笑ってもいいことよ」と姫は云った、「そればかりじゃなく、あの人のうちは金の鉱山を持っ

てるんですって、あの人の故郷は陸前の国で、そこで日本第一っていう金の鉱山を持っているんですってよ、笑わないの」
「まあ待ちたまえ」私は笑わなかった、「それできみは、それにもかかわらず、彼を失恋させたと云うのか」
「そうじゃないの」
「だっていまきみが云うには」
「そうじゃないのよ」と彼女は首を振った、「あたしは承知したの、あの人から艶書が来たから、すぐに承知の返事をだして、逢う時刻まできめてあげたのよ」
「きみの文章は難解だからな」
「うそよう、あたしちゃんとわかるように書いたことよ」
「ではなぜ彼は失恋したんだ」
「それがわからないから、たぶん誤解してるんだろうと思うからあんたに頼むのよ」と姫は云った、「ねえお願い、早く追っかけていって、あたしの気持をようく話して、ぜひとも連れ戻して来てちょうだい」
「でかけたのはいつだ」
「今朝はやくですって」
「馬でゆこう」と私は云った、「しかし、出家するんなら寺はいくらでもあるのに、なんだってまた摂津なんぞへいったのかね」
「よく知らないけれど、なんでもたいへん高徳なひじりがいて、——そうよ」と彼女は云った、「そうだわ、堀川の資兼さまもそのひじりの弟子になるってでかけたはずよ」

「堀川のって、検非違使の別当か」
「いってちょうだい」と姫は云った、「そんなことどうでもいいから、早くいって連れ戻して来てちょうだい」
「もうひと言」と私は云った、「三条家のほうはきっと頼むよ」
そして私はとびだした。
私は友人の馬を借りて、紀ノ友雄を追いかけた。私の友人の馬だから馬もたいした馬じゃない。また私の馬術ときたら、賀茂の祭りのとき、いちど前駆に選ばれて乗っただけなんで、それこそ馬の良否にかかわりはないんだが、それでも歩くよりましだった証拠には、芥川というところで彼に追いつくことができた。紀ノ友雄は老人の下部を連れて、乾いた道を、くたびれたようすもなく、歩いていた。
「おい待て」と私は云った、「ちょっと話があるんだ」

## 二

紀ノ友雄は私の云うことに耳をかさなかった。しかたがない、私は馬を曳きながら、彼のゆくほうへついていった。ついてゆきながら、私は彼を観察し、そうして、自分がひどく空腹なことに気づいた。
——こいつ、なかなか立派じゃないか。
私は腹のなかでそう思った。私は大学寮で彼と知りあった。私は大学を出て五位の蔵人にありついたが、彼はまだ学生の筈である。私はこれまで彼などは眼中になかった。

彼が奥の国から出て来た田舎者であり、おやじが墾田を寄付した代償として、大学寮へはいることができたということは聞いていた。だがそんな人間はいくらでもいるし、金のちからで入学するようなやつにろくな者はない。たまに優秀なやつがいたところで、学寮を出ればそれまでなんだ。官途に就くなんてことは、京そだちのわれわれにだってむつかしい。私なんか末流にしても藤氏一族のなかにはいるんだが、それだって詩歌管絃を利用し、権門をうかがい閨閥にもぐり、阿諛、賄賂、――はまだいいとして、出世のためにはこころならぬ恋までもしなければならない。紀ノ友雄などはどうせ田舎へ帰る人間だろうし、こっちは利用価値のない者とつきあっている暇なんかないから、これまで気にとめて見たこともなかったのである。

だが、いま改めて見ると、彼はなかなきりっとして男らしい。胸に失恋の苦しみを隠しているためかもしれないが、その角ばった相貌にも、田舎くさいながら思索的なような、奥深いような、――なんといったらいいか――つまり、一種の或る種のものがあるように思えた。私はもういちど自分の空腹なことを認めながら、彼に対してたのもしさと友情を感じないわけにはいかなかった。

「ときに話は違うが」と私は云った、「きみの故郷のうちは金の鉱山を持っているそうじゃないか」

「私は誤解なんかしていません」紀ノ友雄が云った、「あなたのお話を聞くまでもなく、私はあの姫の返書を読みましたし、返書の内容はわかりすぎるほど明白でしたよ」

「だって、――おれが聞いたところだと、きみは失恋したそうじゃないか」

「失恋じゃないと云いましたか」

私は咳をし、馬の手綱をひっぱった。その老いぼれ馬はくたびれたとみえ、さも当てつけるよ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c